永和地区の概要

高野（こうや）

高野町には高い野原や丘は無い。全国的に平安時代（一二〇〇年前）に初期に開発されたところを当時は「こうや」と呼んでいた。その代表が和歌山県の高野山で、「高野」とは当て字。

町北（まちきた）

明治二十二年四月一日、栄和（えいわ）村が誕生したものの明治二十六年には高野村と町北村に分かれた。若松町の北側に位置することから町北村と名付けられた。

永和（えいわ）

明治二十二年（一八八九）二月、町北の各村と高野の各村が合併することが決まり四月一日「栄和村」が誕生した。同時に現在地にある上高野小学校が栄和小学校へ改称された。しかし明治二十四年（一八九一）村議会補欠選挙や村長選挙で両村はことごとく対立、明治二十六年六月三日、栄和村は分裂した。村が分裂したので明治二十七年二月両村で学校組合を設立、呼び名の「えいわ」は残し、文字は「永く和が続くように」と願い「永和小学校」にした。

会津アピオ

アピオとは、ラテン語でネットワークの結ぶ、つなぐを意味。平成四年二月には卸商団地組合設立が設立され、平成七年十月「会津アピオ」に名称が決定された。

せせなぎ川

永和小学校の校歌にある川で、「せせらぎ」は、きれいな川を意味しますが、「せせなぎ」は汚れた川の意味である。一箕町の金堀（かねほり）金山から汚水が流れていたため。

下荒久田（しもあらくだ）地区

荒久田とは、鎌倉時代から室町時代にかけての新たに開発された「新田」を意味し、下にあることから下荒久田という。室町時代から江戸時代には、米沢へ行く、米沢街道上町が通っていた。集落内には、享禄四年（一五三一）に尊勝という僧により創建された医王山宝蔵院と辨天堂がある。八乙女（やおとめ）神社は、南会津の只見町梁取の南にある八乙女村から移したことから八乙女神社（神官は宗像姓）という。稲作の神と芸能の神、荒久田から屋敷・中ノ明へ神社が分けられている。

屋敷（やしき）地区

中ノ明屋敷と呼ばれていた。屋敷とは、戦国時代末から江戸時代初めに開発された集落を呼ぶ。「はりた」～「こうや」～「あらた」～「やしき」～「しんそん」～「しんでん」と開発された村の変化している。会津では、「しんでん」は既存集落からの移転で、「しんそん」は、他集落からの移転者による新開発の集落を意味する。

屋敷は、南会津郡只見町梁取の梁取城が伊達政宗によって攻められ、新潟の魚沼郡へ移動し、その後に現在地へ移動したものである。神社と寺は、下荒久田と一緒で、八乙女神社は、只見の八乙女村に由来する。

会津戦争の痕跡

会津戦争において、屋敷は西軍の進攻を受け、焼き払われたが蔵が二棟だけ残った。宗像家の蔵がその一つで、「薩州（薩摩藩）大砲方二番丈リク（上陸）」と墨で書かれていることから、八月二十三日、若松城下進攻時から数日中に描いたものとみられる。屋敷は、薩摩藩大砲隊の襲撃を受け焼かれた。もう一棟残されたのは、雪野家の蔵である。

中ノ明（なかのみょう）地区

観音寺は、草創は不明だが、真言宗自在院の末寺で、天文（一五三二～五五）中に宥栄が再興している。本尊は、沼木沼内に沈んで、毎夜光っていた仏像。沼の中が明るくなったことから中ノ明と名付けられた。昔は、明吉山観音寺であったが、現在は、妙吉山密蔵院といい十七番札所となっている。三月十七日の祭礼には沼で刈り取られた稲

穂を供えて供養していた。ご詠歌は
「参るより　頼みをかけし　観世音　沼木の沼に　浮かぶ水鳥」

中ノ明館跡

中ノ明館跡は、『新編会津風土記』に、延徳中（一四九〇年頃）大島小太郎守信によって館が築かれた。大島氏が住んでいた館跡は、町北連絡所跡である。六郎常義が先祖で、六郎とは千葉氏の一族で、千葉県佐原市付近に住んでいた国分(矢作)常義のようである。

達摩（だるま）地区

達摩堂があることから名付けられた。中ノ明から分かれた村で、慶長五年（一六〇〇）に上杉景勝による神指城築城に伴い、武藤村から移転して村ができた。城は、築城が中止され、元の集落に戻った家もいたが、戻らずそのまま住みついた家があった。

藤室（ふじむろ）地区　村の北には、神指から移された天満宮がある。慶長五年（一六〇〇）に上杉景勝による神指城築城に伴い、武藤村、天満村、横沼村、東神指村などから移転して村ができた。城は、築城が中止され、元の集落に戻った家もいたが、戻らずそのまま住みついた家があった。会津の皆川一族の総本家は藤室に住んでいた。

会津戦争の時、西軍が城下に侵入した二日後の慶応四年（一八六八）八月二十五日、会津藩と西軍との戦いが町北町であった。神指町橋本の柳橋のたもとでは西軍の大垣藩と長州藩が陣取り守備していた。会津藩では、越後街道と米沢街道の双方から若松城下に入ろう神指の高久から進行する作戦をとった。その戦いは、娘子隊（婦女隊）の中野竹子らが戦ったことで知られている。その時、会津若松市町北町藤室、中ノ明の集落は、会津藩によって火が掛けられ、ほぼ全焼し、残ったのは数軒だけとなったという伝承がある。八月二十五日の災難を忘れないようにと、藤室では、今でも二十五日は火伏として、「愛宕神社祭り」を開催し火災が起きないよう祈願している。町北町藤室の皆川家の伝承では、戸ノ口原の戦いに行ったものの激戦で恐ろしくなり、すぐには家に帰らず二日間隠れて戻ったところ、家は燃やされて無くなっていたという。

平沢（ひらさわ）地区

広沢と呼ばれていた。湯川と大川から支流だった応湖川が平沢の西でぶつかり波が立っていたので高瀬、合流し広くなっていたので広沢と呼ばれていた。その後、湯川も改修され、平らな沢になったことから「平沢」となる。曹洞宗国性寺は会津三十三観音札所十六番で御詠歌は「参り来て　浮世をここに忘れ置く　心及ばぬ　広沢の月」

平沢館跡

村の北には、『新編会津風土記』に館跡があり、室町時代には二国(新国)若狭が、三十七メートル四方の広さがあった。館跡近くには、「アラハバキ神社」がある。その神社の発祥は、青森県津軽地方で、製鉄集団の神社である。会津地方では、平沢と会津若松市湊町赤井にあり、南は埼玉県秩父まで分布している。

中地（なかぢ）地区

湯川によって中洲のような地形を中地ということから名付けられた。室町時代に平塚に住んでいた平塚氏が移転し、住むようになった。平塚に住む平塚氏は、平塚で由来の平塚の長絶えないようにと中地から移動した家である。

中地館跡

『新編会津風土記』に、天文十二年（一五四三）に猪苗代兼載の弟子で、平塚丹波守実恒が住み、天満宮の前で連歌を歌ったという。館跡は、南北五十四メートル、東西三十メートルあり、子孫は現在ここに住んでいない。平塚氏の本家は、会津戦争直後、会津藩主と共に青森県の斗南藩へ移ったが、その後、中地に戻る

と、本家の関係者が本家に入りそのままに住んでいたことから、住むことができず、喜多方に移住し、現在も平塚氏本家は喜多方に住んでいる。中地には、今でも本家の墓地がある。

上高野（かみこうや）地区

平安時代に開発された地区。村東にある西方寺は『新編会津風土記』によると、曹洞宗で、穴沢氏が勢力を持っていた天文八年（一五三九）に、僧の伝長が開基し、伊達政宗により焼失し、文禄元年（一五九二）に寒首座が再興したという。

高野神社と白髭洪水

村の北西には、高野町神社がある。『会津鑑』によると、此の神社、天文年中の洪水にて、神の祠が漂い来流れ着き神社が建てられている。少し丘のようになっていた所に留まったので、丘降神社といわれるようになった。洪水とは、『会津旧事雑考』に天文五年（一五三六）六月二十八日「白鬚大水」を指すもので、会津最大の洪水とされ、大川（阿賀川）の流れが、それまでは本郷から新鶴方面に流れていたが、本郷から北に流れが変わった大洪水のことである。

下高野（しもこうや）地区

高野とは平安時代初めに開発されたところを意味する言葉である。村西に、十里柳がある。『新編会津風土記』に、至徳元年（一三八四）に黒川城が築城された時、材木を集めた場所とされる。それから三年後の嘉慶元年（一三八七）千福寺を良尊が建立している。良尊は、一字一石経を埋め、その上に山王神社（現在は日枝神社）を建てている。『伊達治家記録』に、この寺は、伊達政宗の会津進攻により焼失し、乳母の妙心院のために膳徳院を建てている。

十里柳（じゅうりやなぎ）

若松城の大手門から十里あったためである。『北会津郡郷土誌』によると「府城より十里に当る故にその印として加藤嘉明（よしあき）植えしもの」。保科正之公以前の一里は、六町（六五四メートル）が一里だったため目印で植えたもので、十里柳の地は北出丸から六・五四キロある。

吉田（よしだ）地区

葦の多い田であったことに由来するようだ。上吉田は、江戸時代前半まで神指町東神指にあり、その中で、次男や三男が新天地の吉田にうつったという。古墓の江川家墓あり「上吉田界沢引越」と彫られている。その墓には、「享保十九年（一六三四）」と「肝煎役二十年余」とある。上吉田の稲荷神社が老朽化に伴い、平成二十八年九月に解体されて、十一月に新築した時、屋根の柱に「正徳二年（一七一二）銘の墨書きが発見されたことから創建年が判明した。古墓の記録と神社の創建年代と合うことから、上吉田は、江戸時代の一七一二年に現在地に移ったことが分かった。その年代は、天然痘が大流行したことが『家世実紀』に書かれ、終息までには三年間かかっている。疫病により移転した可能性もある。地蔵尊堂は、宝暦三年（一七五三）に当初六体の地蔵尊が祀られたが、その後一体無くなり、現在五体で、子育て地蔵としてご利益がある。

矢玉遺跡と「亀の尾」

下吉田の矢玉遺跡からは、一二〇〇年前の種籾の品種を書いた「木簡」が平成六年の発掘調査で発見されている。種籾木簡は、五点あり、「白和世」二点、「荒木」一点、「長非子」一点、「足張（すくはり）」一点である。そのなかで、「足張」と「荒木」は明治以降も栽培され、徳島県や広島県に種籾が残っていた。「白和世」は、明治時代に東北地方で広く栽培され、明治二十六年（一八九三）の冷害時、山形県庄内町の阿部亀治が「白早生」の中に倒れなかった三本の穂を改良し三年後の明治二十九年「亀ノ尾」が誕生。

「白早生―亀ノ尾―陸羽一三二号―農林一号―コシヒカリ・農林一〇〇号」

森台（もりだい）

江戸時代以前は、西木流の西側、東森台と現在の東約百㍍に中森台があった。この村は、北半分が湯川村という変わった村で、それぞれに神社と寺がある。現在西木流となっている墓地には東森台があった。

『会津古墨記』『会津鑑』に、延徳年間（一四九〇年頃）に佐瀬七郎盛滋が館を築いたとある。

界沢（さかいざわ）地区

会津郡と河沼郡との境にあることから名付けられた。また、沢とは「たく」とも呼び、東高久から分かれたことに由来する。界沢西にある工業団地の地は、東高久と呼び約千二百年前、会津郡の下に「郷」があり、その一つ「多具郷」が変化したものである。江戸時代初めの慶長十六年（一六一一）、慶長会津地震によって村が崩壊し、慶長十八年（一六一三）に、界沢と高久に分かれている。

界沢館跡

界沢には、二つの館があった。一つは村中で東館（本館）といい、『新編会津風土記』によると、南北四十八メートル、東西三十八メートルあり、松本土佐が築き、後に金屋尾張が住んでいたという。金屋姓は、その名残である。村の北西には、西館（分家館）が、南北五十四メートル、東西三十八メートルの館があり、金屋氏が住んでいたという。

上杉時代、直江兼続の東雲寺

村の北西には、耕新寺があり、天正三年（一五七五）に獨峯が再興している。また、北西の熊野神社附近に、越後国南魚沼の雲東庵を直江兼続が持ってきた東雲寺と名乗り途中まで寺を建てていた。その後、東雲寺は、直江兼続が慶長六年（一六〇一）に米沢に移封となると、寺も移ったが、『新編会津風土記』に東雲寺会津若松市大戸町上三寄と大町に分かれ移されたが、大町の寺は、会津戦争で焼失している。

西木流（にしきながし）地区

木流の西にあることから江戸時代に名付けられた。室町時代には、西側部分は、東森台と呼んでいた。『新編会津風土記』に、南北三十四メートル、東西四十一メートルの館があり、延徳年間（一四九〇年頃）に佐瀬七郎盛滋が館を築き、天正頃（一五九〇年頃）にはのちに森代氏と名乗った森代又治郎が住んでいた。西木流の南にあった西木流C遺跡からは九世紀中頃に営まれた掘立柱建物跡が検出され、東海地方の緑釉陶器や灰釉陶器が出土していることからも有力豪族が住んでいたことを示している。

橋本木流（はしもときながし）地区

橋本木流の馬頭観音堂か平塚の薬師堂を建てる時、会津若松市河東町藤倉の二階堂（国重要文化財・室町時代建立）の余った材木を川に流し流したて建てられたもので、その川は、「大工川」と和ばれ、平塚の南を流れている。『新編会津風土記』には、

「昔、河沼郡代田組藤倉村に二階堂を建立せし、材木の余れるを川に流し来り、この村に観音堂を造立す、故に村名とし、その川も大工川と名づけしぞ」

と書かれている。と書かれている。一月十七日、四月八日の例祭では、会津一円の大行事と言われた。その年の農事を無事に送るため飾り馬と共に祈るとともに、同祭礼には馬頭観音堂の前にある子育稲荷神社にも町方より御産の無事を祈る参詣の人々が長蛇の列をなし賑わうありさまだった。昭和二十年代までは、住職も慧日寺、勝常寺より応援を受け四月八日には、堂の前に馬が千頭くらい描かれている絵旗（明治三十六年制作）を掲げて、参詣を迎えていた。昭和四十三年には、馬頭観音堂がローソクの火で焼失したが、本尊の馬頭観音は難を逃れたこともあり、昭和四十五年に近隣の支援によりコンクリートで再建されている。『江戸時代には会津藩主が、見に来ていたといい、岩浅松石の年中行事の四月にも描かれている。

木流の彼岸獅子

会津の獅子舞は、天喜四年（一〇五六）に源頼義、義家が安部一族を討つ時、家臣の士気を鼓舞するために舞ったともいわれている。または、義家が八幡神社の分霊を会津に勧請したときに舞ったともいう。天正二年（一五七四）に疫病が流行り、神に獅子舞を奉納して病気を追い払ったともいう。寛永二十年（一六四三）に保科正之が山形から会津に移封になった時、一緒に伝えられたとされている。正保二年（一

六五四）に那須市野沢より小松の獅子が伝わったともいう。

平塚（ひらつか）地区

約六百年前に、平塚氏というのが住んでいたことから名付けられた。『新編会津風土記』によると、室町時代の応永二十二年（一四一五）に平塚五郎左衛門が薬師堂を建てたという記録がある。その後、平塚氏は町北町の中地に移っている。

南北朝時代、埼玉県春日部市の領主だった春日部氏は、南朝方であり敗北し、関東に住んでいたが、上杉氏の配下となり、その後、新潟県へ移り、慶長三年（一五九八）に上杉氏が会津に入った時、一緒に会津へ来て、平塚に住むこととなった。日本画の春日部たすくはここの出身である。また、平塚には、平塚館跡がある。『新編会津風土記』には平塚四郎某が住んでいたとあり、その館跡は、春日部宅である。天正中（一五七三～九二）頃に保仙という僧がいた。『会津鑑』には、応永二〇年（一四一三）に薬師堂が建てられたとある。

上沼の「馬頭観音臨時停車場」

明治三十七年（一九〇四）一月二〇日、現在の磐越西線、当時の岩越鉄道は、渋沢栄一が取締役で就任し、若松から喜多方町間が開通した。鉄道は、木流の馬頭観音堂東側を通っている。昭和九年十一月一日には、堂島、笈川、姥堂の無人駅も設置されるが、堂島駅は、当初馬頭観音堂東側に設置する予定であった。その場所は、上沼に停車場として利用できるよう細長く用地が確保されている。

沼木（ぬまぎ）地区

沼木とは、沼に囲まれた村を意味する。

沼木館跡

上沼木には、室町時代に館があり、『会津古墨記』『会津鑑』に、南北五十六メートル、東西五十二メートルの沼木館があり、「菊地弥三次頼清住」（会津鑑には菊地弥三治頼清とある）あり、その跡は、菊地則雄氏宅である。菊地氏は、裏磐梯桧原の穴沢一族の家臣で、木流の穴沢氏の配下で、沼木と中前田を支配していた豪族である。伊達政宗の会津進攻後も残り、肝煎を勤めていた。文禄二年（一五九三）には、光福寺を僧の秀賢が再興している。

中前田（なかまえだ）地区

中前田のせせなぎ川を挟んだ北には、中島村というのが昔あった。その前にある田だったので中前田という。

中前田館跡

上沼木の菊地氏が、館を築いていた。南北三十四㍍、東西四十五㍍あり、集落東側に土塁の一部が残されている。『会津古墨記』に「菊地右近頼景住」とあり、『会津鑑』には「菊地右近頼住」と書かれている。上沼木の菊地氏の分家である。このことから、中前田は菊地氏が開発した集落である。

七ツ壇遺跡

集落内を戦国時代と江戸時代の米沢街道上道が通っていて、集落の南、街道沿いには「七ツ壇遺跡」があった。昭和五十三年十一月から十二月にかけてほ場整備に伴い市教育委員会が発掘調査を実施した。一号塚跡から「弘治四年（一五五八）今日吉日」と彫られた銅製経筒が出土している。これは、その時代に全国を回遊していた修行僧「廻国聖（かいこくひじり）」が埋めたことが判明している。

鶴沼（つるぬま）地区

せせなぎ川と上高野の間に鶴の首のような沼があったことから名付けられた。『会津鑑』によると「下小屋村」とも呼ばれていたとあるが、それは誤記ではないかと思われる。『新編会津風土記』には鶴沼山松明寺との記載があるので、いつから呼ばれたかは不明だが、江戸時代から鶴沼と呼ばれていた。ここには、木流の穴沢氏の影響を受け、葦名氏の四天宿老の松本氏が滅んだ後、一族を保護し住まわせている。後に松本氏は、河東町藤倉に移り郷頭となっているが藤倉には延命寺があるものの松本氏だけは秀長寺の檀家である。

文　永和地区地域づくり協議会会長　石田明夫

「令和五年三月　永和の暮らしと歴史」を参考に修正